

【全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞】

農家の部

愛媛県西予市

み よし しか つぐ
三 好 鹿 次 氏



1 経営者及び経営内容

三好氏は、愛媛県有数の水田地帯である西予市で水稻（酒米を含む）・麦・大豆を作付する専業農家で、平成9年に認定農業者となり、長年、地域のリーダーとして活躍している。

氏は81歳、主に妻と2人で水稻・麦・大豆の大型経営を行い、水田1,506a（うち借地1,346a）をフル活用している。なお、農繁期は、林業で雇用している従業員1名と会社勤務の息子（53歳）が圃場作業に入ることもある。

地区の中心的担い手は少なく、近隣農家からの借地を積極的に受け規模拡大を図ると共に、近隣農家から水稻の乾燥調製を引き受けるなど地域農業の維持発展に幅広く貢献している。

表1 経営作目の概要

主要作目名	栽培面積	農家粗収益全体に占める割合
麦	370(a)	11%
水稻	742(a)	49%
大豆	234(a)	14%
雑収入		27%
計	1,346(a)	100%

表2 家族の労働状況

続柄	年齢	年間従事日数	
			うち麦作従事日数
本人	81	250日	16日
妻	77	100日	—

2 技術上の特色

ブロックローテーションによる2年3作と、中型機械の有効活用による作業の効率化で大規模経営に取り組みながらも、基本技術を忠実に励行して天候に左右されない収量・品質の高位安定化と単位労働時間の短縮、コスト低減を実践している。令和6年産の降雪・湿害で麦の栽培には苦慮した年においても、水稻前と麦作前の年2回施行している弾丸暗渠の効果により湿害を最小限に回避した。さらに、適期管理を逃さない次の作業に備える姿勢、生産者が運営する機動的な無人ヘリ組合を活用した適期の赤かび病防除、きめ細やかな施肥（追肥3回）・踏圧（麦踏4回）等により、確かな収量・品質の確保を継続して達成している（令和6年産の小麦県内平均収量対比147%、上位等級率94%）。なお、裸麦でも県平均収量対比150%と安定した収量を確保してい

る（上位等級比率 100%）。

（１）土づくりと鶏糞堆肥の利用でコスト低減

土づくりは、圃場に応じた稲わら・麦わらのすき込みを基本に、排水性や土の硬度など一つ一つ圃場の特性を十分把握したうえで物理性の改善に気を配っている。

また、肥料が高騰する中、J Aなどの情報をもとに鶏糞堆肥を利用して基肥削減につなげている点は注目である。なお、有機系肥料を利用するには、肥効発現のタイミングを考えると麦の作付前の散布が必要で、作業にゆとりを持たすために９月に収穫可能な水稻早生品種（コシヒカリ等）を作付けするなど、作業工程を工夫している。

鶏糞堆肥の施用は２年３作の間に、麦作前（100 kg/10a）に施用し、粒状苦土石灰（60～100kg/10a）による酸度矯正を行っている。年間を通して水田フル活用のため、地力増進はしっかりと実施している。

（２）湿害対策

圃場によっては沼地跡のため排水性が悪く、水稻栽培でも湿害に悩まされることがある。そのため、水稻作前と麦作前の年２回弾丸暗渠を施工することで、難しい土質にもかかわらず良好な排水性の確保に努めている。そのため、額縁明渠以外の明渠施工なしでも適期に踏圧等の作業が可能な条件を作り出し、湿害対策にかかる労力の削減にもつなげている。

（３）品質向上への努力

種子更新は、毎年行っている。また、病虫害の適期防除に努め、赤かび病は無人ヘリ防除を利用しているが、同地域では生産者が自ら運営する防除組合が３つあり、最適なタイミングでの集団防除が可能である。さらに、６条播き播種機による効率的な播種（条間は 20cm）、弾丸暗渠によるしっかりとした排水対策により初期生育の確保、麦踏ローラーによる踏圧の徹底（４回）、追肥（３回）の適正施用、春先の雑草が生える前に麦の生育量を確保することなど、細心の気配りをしている。

施肥時期や量、麦踏、耕起方法など圃場に合った高い技術を身に着け、天候に左右されない高い収量性の確保と上位等級率 94%の麦生産につなげている。

３ 収量の向上、品質改善

令和 6 年産の 10 a 当たり収量は、主力品種の「チクゴイズミ」で 427kg（令和 4 年産 515kg、令和 5 年産 525kg）、県平均収量 291kg（令和 4 年産 462kg、令和 5 年産 399kg）を大幅に上回る水準（対比 147%）で、品質面も 1 等 94%（県平均 1 等 94%、2 等 6 %）と高収量・高品質の麦づくりを実現している。

裸麦栽培でも、県平均収量（216kg）が大幅に低迷する中、小麦と同様の排水対策と適期管理により高い水準を維持していることは、長年の経験と確かな技術力の証である。

県では、裸麦品種を令和元年から「ハルヒメボシ」に切り替え3年連続豊作で、折しも新型コロナ感染症と相まって実需との需給バランスが崩れ、令和4年産から新たな小麦生産への転換を図った（200ha分）。

当市でもこれまでの小麦品種「チクゴイズミ」に加え、「さとのそら」、「シログネコムギ」の作付を求められ、氏も率先的に3品種を栽培し、これらの品種特性や収量・品質データを取りJAや農業者へ周知を行った。

これらのデータから当地区での適地適作や共乾施設受け入れ等を総合的に勘案し、令和4年産は「チクゴイズミ」と「さとのそら」、令和6年産からは、赤かび病対策の観点から、当地区小麦品種は「チクゴイズミ」に一本化することに寄与した産地への助言は素晴らしい。

また、三好氏の高い収量と高品質に繋がる栽培技術は、周囲の若手生産者への刺激になっている。

4 労働時間の軽減

農地は山に囲まれた中山間地の水田地帯にあり、山田地区は基盤整備は行われているが地区内での大規模農家は少ない。そのため、作業性を重視した圃場選定での麦作をおこなっている。

播種作業と基肥施肥、除草剤散布を同時に行い労働時間の短縮を意識している。ただし、「しっかりといいものを安定生産する」という信念から、短縮できた労働時間を「麦踏・追肥」に費やし、近年暖冬及び春先からの気温上昇に影響されない麦づくりに繋がっている。

このような取り組みで省力化・効率化で規模拡大を図りながら、農作業の遅れが微塵もなく、しっかりと収量・品質を確保する「熟練の技」は若手農家の模範となっている。

病虫害防除は無人ヘリ利用組合に委託（本人自ら米・麦・大豆のオペレータとして従事）、乾燥・調製・出荷はRCを利用している。その結果、現在、10a当たりの所要時間は3.78時間（愛媛県平均5.0時間）で令和2年の5.0時間から約25%削減されている。

5 流通の改善・合理化

前述した通り、実需との調整に応じた品種選定その他、乾燥・調製・出荷は地域資源でもあるRCを積極的に利用することで、作業の効率化、品質低下防止、コスト低減（乾燥・調製施設、光熱費）等を実現している。

6 今後の麦作への取り組み

作業の効率化や徹底した栽培管理が可能な水稻・麦・大豆による2年3作の栽培体系を基本とし、農作業は一人でできる経営ビジョンに向かって、さらなる作業効率化や経費削減に向け、作業や栽培管理方法の見直し、新たな機械や技術の導入・模索を積極的に行い、機械を有効に活用する。

7 その他特記事項

東宇和地域では若手農業者が育ってきている中で、氏は81歳でありながらこれまで経験した熟練の技術を活かして現場をけん引する姿は、意欲の高い若手にとって「氏の背中を見ながら追い越せ！」という目標になっている。そのような中、令和6年産のような難しい条件にもかかわらず、管内で一番の成績を達成した「いぶし銀」の取り組みは、「若人よ！俺を超えていけ！」という無言のエールとなり、若い農業者達のやる気をさらに奮い立たせている。

また、農業という職業柄、単独での努力や工夫にて改善を図る中、後輩への助言指導、コミュニティーで維持していかなければならないインフラ（池や水路管理、農道など）をいかにして維持していくかということを真剣に考え、自分自身の農業と併せて地域全体での後継者をいかに育成していくかを考えながら活動している。氏は、平成13年4月に設立した山田生産組合（6名）において代表を務め、山田地区をけん引してきた。その熱意は、生産者同士が気軽に情報交換することが日常となっている地域の風土として現れ、そして、次の世代に受け継がれている。

氏曰く、農業の課題は、「他産業に比べて生産効率の低さ」を指摘されている。求められるのは天候に左右されない「高位安定生産」。実需者に求められる収量品質の確保に向けて、地域をけん引する「熟練の技」を伝承していきたいと語っている。

水稻では、愛媛県ブランド米「ひめの凜」の認定栽培者であり、酒米・加工用米の作付も行っている。

高齢化・担い手不足が各地で問題となっている今、非常に将来性のある地域であり、その中心を担ってきた人物が三好氏である。

○山田生産組合長（平成13年4月設立）として貢献る。

執筆者：愛媛県南予地方局農林水産振興部八幡浜支局
地域農業育成室西予農業指導班 廣瀬宗範

8 耕種概要

前作の栽培状況等	作物名	収穫期	収量(10アール当たり)	有機物及び土壌改良材の種類と施用量		
	水稻、大豆	(水稻)8～10月 (大豆)11～12月	(水稻)510kg (大豆)230kg	稲わら一部、鶏糞堆肥(2年3作のうち麦作前(100kg/10a)に施用)、 粒状苦土石灰60～100kg/10a		
耕起、整地、播種	種子予措の方法		なし	播種方法		
	耕起整地及びうね立の有無		トラクターによるロータリー耕(中溝切)、うね立て無	播種様式	条間	20 cm
	播種時期		11月15～29日(はだか麦11月5～10日)	ドリル播	株間	cm
	播種量		7～8kg/10a		播幅	cm
基肥	肥料名(有機物、土壌改良資材含む)	化成肥料444	鶏糞堆肥	苦土石灰	化学肥料合計	施肥方法
	施用量(10a当たり)	30kg	100kg	60～100kg	N 4.2kg P 4.2kg K 4.2kg	グラントソノー (播種時)
管 理	作業名	実施時期及び方法				
	(中耕、土入、踏圧、除草等)	踏圧:1月8～13日(1回目)、1月20～25日(2回目)、2月5～10日(3回目)、2月22～27日(4回目)				
追 肥	施用時期	1月8～13日	2月26～28日	4月20～25日	化学肥料合計	施肥方法
	肥料名	化成肥料444	化成肥料444	化成肥料444	N 8.4kg P 8.4kg K 8.4kg	(1回目)トラクター (2～3回目)動力散布機
	施用量(10a当たり)	20kg	20kg	20kg		
		実施時期及び方法 (薬剤名、10a当たり使用量、散布機械等)				
病 虫 害 防 除	病 名	赤かび病(はだか麦1回、小麦2回)	4月10日 ワークアップフロアブル、0.8L、無人ヘリ 5月2日 トップジンMフル、0.8L、無人ヘリ			
	害虫名	※R6年産は応急防除実施:ワークアップフロアブル、0.8L、無人ヘリ				
後 作 物	作物名	植付時期				
	大豆	7月10～20日				

9 農業機械利用状況

作業名	使用機械名	型式、規格、馬力	台数			稼働面積 a	稼働期間		実稼働日数	備考
			個人有	共有	借用		月	日～日		
土改資材散布 (鶏糞・苦土石灰)	トラクター、ブロード キャスター	34ps	1			370a	9月28日	～11月15日	1.2	H20年導入
耕起	トラクター、ロータ リー	34ps	1			370a	10月1日	～11月20日	1	
耕起	トラクター、プラウ	34ps	1			370a	10月5日	～11月24日	1	
耕起	トラクター、ハロー	34ps	1			370a	10月20日	～11月26日	1	
基肥・播種	トラクター、グラブドソ ワ、播種機、肥料散 布機、除草剤散布機	34ps 1.8m6条播き	1			370a	11月5日	～29日	2	播種機:H22年導入 肥料散布機:R元年導入 除草剤散布機:R2年導入
除草剤散布						370a				
踏圧(1回目)	ローラー、麦踏ロー ラー	34ps	1			370a	1月1日	～3日	1.5	
追肥(1回目)	トラクター					370a	1月8日	～13日	1.1	
踏圧(2回目)	トラクター、麦踏 ローラー	34ps	1			370a	1月20日	～25日	1.1	
踏圧(3回目)	トラクター、麦踏 ローラー	34ps	1			370a	2月5日	～10日	1.1	
追肥(2回目)	動力散布機		1			370a	2月26日	～28日	1	R5年導入
踏圧(4回目)	トラクター、麦踏 ローラー	34ps	1			370a	2月22日	～27日	1.1	
追肥(3回目)	動力散布機		1			370a	4月20日	～25日	1	
防除	無人ヘリ					370a				無人ヘリ利用組合に委託
刈取り、脱穀	普通型コンバイン	5条	1			370a	6月5日	～9日	2	H24年導入
運搬	軽トラック		1			-	6月5日	～9日	1.5	H24年導入
乾燥・調製	ライスセクター					-				農協へ委託

10 令和6年産作付圃場図

作付状況ほ場位置図



